うたとかたりの対人援助学

第 32 回「集団疎開学童が歌った替え唄」

鵜野　祐介

はじめに ―外山禎彦さんとの再会―

今年（2025）１月中旬、大阪府河内長野市に外山禎彦さんのご自宅を訪ねた。2021 年 7 月に NHK の企画で「戦争中の子どもの替え唄」を取材して以来、３年半ぶりの再会だった。

2020 年８月に『子どもの替え唄と戦争―笠木透のラスト・メッセージ』（子どもの文化研究所）を出版して以来、読者からの感想や情報提供は、皆無ではないが決して多くなかった。そんな中、昨年 11 月末に TBS の若い報道部記者・桝本康平さんから、「戦後 80 年」企画として１年間にわたってこのテーマを取材したいとの依頼を受けた。

12 月中旬、桝本さんは東京から２名のカメラマンと一緒に立命館大学衣笠キャンパスに来て、子どもの替え唄をテーマとする実習授業を撮影した。さらに、何名かの当事者の証言を聞きたいとのことで、外山さんへの取材を提案すると早速スケジュールを組み、この日も 2 名のカメラマンと共に来阪した。午後１時 30 分、私は河内長野駅で合流して、彼らと一緒にタクシーで外山さんのお宅を訪問した。

外山さんの略歴

外山さんは 1995 年に『学童集団疎開日記』（近代文藝社、以下『日記』と記す）を出版されている。同書の奥付に書かれた「著者略歴」に、2回の取材の中で伺った内容を補足して、ここに紹介しておく。

外山禎彦さんは、1934 年 10 月 20 日、大阪市住吉区粉浜（こはま）に生まれた。大阪市内の呉服店に勤める父親、母親、祖母、自分、妹、弟の６人家族だった。自宅近くにあった大阪市立東粉浜国民学校初等科に入学した。１学年に３クラスあった。４年生だった 1944 年９月、学童集団疎開に参加し、翌年 10 月まで疎開生活を送った（＊当時、米軍の空襲を想定し、大都市の国民学校児童を、縁故を頼って疎開した者を除いて、学校単位で地方に疎開させたが、これを学童集団疎開と呼んでいる）。

大阪市立住吉一中、大阪府立今宮工高より大阪学芸大学（現・大阪教育大学）を卒業。理科（地学）の教員として、私立上宮高校、兵庫県立尼崎工業高校、大阪府立茨木工業高校、大阪府立今宮高校、大阪府立長野高校の各教諭を経て、大阪府立西浦高校特別嘱託。

定年後は、社会人や子ども向けの天文・科学教室を開く一方で、学童疎開体験を語る平和学習活動に精力的に取り組んでいる。

出発の日　1944・9・18 頃

『日記』の「はじめに」において、出発の日の様子が次のように綴られている。

出発の日の朝、校庭に集まっていると、誰かが「あっ、バタキンや、すごい。」と叫んだのです。見ると、軍刀を吊り、少将の襟章の輝く校医の村山先生がのっしのっしとやって来られたのです。その頃の子供は襟章を見れば兵隊の位がわかったのです。将官の襟章はその地が全部金色だったので、俗にそれをバタキンと呼んでいました。その村山少将が朝礼台の上で万歳三唱の音頭取りをしてくれたものですから、僕たちは勇躍、学校を後にしたのでした。

疎開先は、大阪府の南部、岸和田から奥に入った葛城山の麓、牛滝村のひなびた旅館でした。第一日目の夜は、今の修学旅行生と同じで、枕合戦をするもの、「王手、王手。」などと、寝言の真似をして笑わせる奴などが居て大騒ぎでした。しかし翌朝、鼻をつままれて目を覚まされ、自宅にいるときのようにのんびりしているわけにはいかない現実を早くも知らされたのでした。

日記は、到着後十日ほどした９月28日から始まっている。

『日記』に記された歌や音楽

『日記』には、どんな歌や音楽が記されているだろうか。日付順に紹介してみたい（漢字の旧字体は鵜野が新字体に変更した。[ ]内は外山氏による加筆、（ ）内は鵜野による補足、句読点の一部を改変）。

1944・10・5　今日は村の秋祭なので僕たちもお宮まいりをしました。……僕は軍歌集を持っていった。

10・30　昼からじゆげふ（授業）の一部分の時間をある人が［に］ハーモニカを吹いてもらひました。とても上手でした。

11・11　昼から吹奏楽団のをぢさん（おじさん）が来られました。いろいろな音楽を聞かしてもらって帰へりしなは紅葉橋のちかくまで音楽を奏しながら［行くのを］送くりました。

12・22　今日昼食をすんでから火鉢にあたって歌をうたってゐると伝令で空襲といひました。

12・27　午前は式歌の練習をしました。

1945・1・8　昼から三年生が歌の練習を紅葉寮でしたので僕たちは自由時間でした。

1・19　昼から森のおぢさんが音楽を聞かして下さいました。これで二回目です。

2・14　今日も朝会がなかった、たいこがなったので授業のたいけい（隊形）にすはって（座って）ゐると先生が「大広間へ行け。」といはれた。行くと卒業式の歌を練習した。僕たちは　ほたるの光であった。六年生は　仰げば尊し　であった。昼から紅葉寮でぼくたちを代表して劇をするものたちがけいこしてゐた。それから卒業式に四年がうたふ歌を大広間で練習した。

3・7　昼から音楽をした。

5・4　昼から歌唱練習をした。

6・8　引き続いて片山先生のしだう［指導］で軍歌の練習（を）した。

6・9　授業の前、ようちえんの時のことを思ひながらようちえんの歌をうたってゐると急に「ドドドドドドッ。」と地響がした。

6・15　昼から日本陸軍の歌を練習した。

6・18　昼から自由に遊んだ。僕と中村君とでさくらんぼを取りにゐった。其後、軍歌練習をした。

7・7　昼から七夕祭りのゐあんかい（慰安会）があった。うたやげきがあった。

7・24　午前中は授業であった。歌のしけんがあった。

7・26　昼からの自由時間にいろ ／＼ な歌を書き移［写］した。

9・27　昼からシロホン・ハーモニカ・ピアノを高田君打越君等がひいてゐるのを横で聞いてゐた。

歌っていたのは主に軍歌や式歌だった。また、時折ハーモニカ吹きや吹奏楽団の演奏を聴く機会があった他、村の秋祭や慰安会で歌や音楽に触れていた。

軍歌は、1945年６月以降、頻繁に記録されている。練習も行い、教師（片山先生）による歌唱指導もあったようだが、その頃になってから急に軍歌を歌う機会が増えたのか、それとも日記に書く話題が他に思いつかなかったからなのかは不明。

外山さんは集団疎開に行く時、２冊の軍歌集を持参し、これとは別に１冊、さまざまなジャンルの歌の歌詞を筆記した手帳を携帯していた。1944 年10月５日、村の秋祭の宮参りにも軍歌集を持参し

ている。神社への道中、軍歌を口ずさんでいたのだろうか。2025 年 1 月の取材の中で外山さんは、「軍歌を歌うと元気になるから歌っていた」と語った。

式歌は、卒業式に歌われた「蛍の光」や「仰げば尊し」の他、具体的な歌の名前は書かれていないが、明治節（11 月 3 日）、大詔奉戴日（毎月 8 日、1941 年 12 月 8 日の大東亜戦争開戦にちなむ）、四方拝（1 月 1 日）などの式典でも歌われたようだ。

四方拝の式歌は「一月一日」で、その歌詞は「年の始めの例とて　終わりなき世のめでたさを　松竹たてて門ごとに　祝う今日こそ楽しけれ」だが、その替え唄も全国各地で歌われた。「トーフの始めは豆である　おわり名古屋の大地震　松竹ひっくり返して大さわぎ　イモを食うこそ屁が出るぞ」（笠木透『昨日生れたブタの子が　戦争中の子どものうた』音楽センター・あけび書房 1995：10）。ちなみに、外山さん自身はこの替え唄について、「聞いたことがありますが、自分では歌った記憶はありません」とのことだった。

『日記』に記されなかった替え唄

『日記』には替え唄のことはまったく出てこない。それは、教師（岩間先生）に提出され「検閲」を受けていたからである。例えば、1944 年 10 月 14 日の項の最後には、「（よいところに気がつきました。岩間　印）」とある。日を追うにつれて、教師の「検閲」もいい加減になったと、外山さんは今年 1 月の取材の中で話していたが、替え唄を『日記』に書き留めることには躊躇したのだろう。

前回の取材でもいただいた「戦中戦後にうたわれた替え歌（ママ）」（2021 年 6 月 25 日作成）という元歌と替え唄を併記した資料を今回もいただいたので、ここに紹介する。[ ]内は外山さんによる解説。

＜戦時中＞

・「日本陸軍」

天に代りて不義を討つ　忠勇無双のわが兵は…
⇒天井に金槌釘を打つ　チュウチュウ鼠の運動会

・「月月火水木金金」

朝だ夜明けだ潮の息吹き
うんと吸ひ込むあかがね色の
胸に若さの漲る誇り　海の男の艦隊勤務
月月火水木金金
⇒朝だ夜明けだ御飯の支度
それが済んだら紙屑拾い
・・・・　るんぺん生活気楽なもんだ
けつけつ痒い痒い蚤、虱

・「皇軍大捷の歌」

国を発つ日の万歳に　しびれるほどの感激を
こめて振ったもこの腕ぞ　今その腕に長城を
超えてはためく日章旗
⇒パーマネントに火がついて　みるみるうちに禿げ頭
　禿げた頭に毛が三本　あゝ恥ずかしや恥ずかしや
　パーマネントはやめましょう

・「愛国行進曲」

見よ東海の空明けて　旭日高く輝けば
天地の正気溌溂と　希望は踊る大八州
⇒見よ東条の禿げ頭　旭日高く輝けば
　おでこがぴかりと光ります
　蠅が止まれば滑ります
[この替え歌は戦後になってどこかで読んだのであった。]

・「軍艦行進曲」（イントロ）

⇒じゃんじゃんジャガイモ薩摩芋

・「軍人勅諭」

軍人たるの本分は　心は忠に気は勇み
義は山よりもなほ重く　死をば軽しと覚悟せよ
[末尾の部分のみ]⇒砂糖は甘しと覚悟せよ

＜戦後＞

・「あの町この町」

あの町この町　日が暮れる　日が暮れる
　今きたこの道　かえりゃんせ　かえりゃんせ
おうちがだんだん　遠くなる　遠くなる
　今きたこの道　かえりゃんせ　かえりゃんせ

⇒「今きたこの道」を「去年来た」に、「遠くなる」を「近くなる」と言い換えたのであった。集団疎開先からの帰途。

・「ズンドコ節」
青い背広にマドロスくわえ　肩で風切る小粋な男
⇒青い顔してなんば粉食べて　肩で息する哀れな男
[なんば粉＝南蛮黍、すなわち、とうもろこしの粉末。終戦後よく配給された。]

・「子を頌う」
太郎よおまえはよい子供
丈夫で大きく強くなれ
おまえが大きくなる頃は
日本も大きくなっている
（4行目）⇒「日本は小さくなっちゃった」
[NHKラジオ「日曜娯楽版」より]

＜補遺＞
・「元寇の歌」
四百四州(しひやくよしゅう)を挙(こぞ)る　十万余騎(よき)の敵
国難ここに見る　弘安(こうあん)四年夏の頃
（2行目）⇒「おっさん銭おくれ
穴の開いた銭おくれ」

・「めんこい仔馬」
ぬれた仔馬のたて髪を　撫でりゃ両手に朝の露
呼べば答えて　めんこいぞオーラ
駈けて行こかよ　丘の道
ハイド　ハイドウ　丘の道
⇒越中富山の薬屋さん　鼻くそ丸めて　まる薬
白墨削って粉薬オーラ
馬のしょんべん　水薬
それを買うのは　あんぽんたん

・「湖畔の宿」
山の寂しい湖に　ひとり来たのも悲しい心・・・
⇒「昨日生れた蛸八が　弾に当って名誉の戦死」

・「紀元二千六百年」
金鵄(きんし)輝く日本の・・・
⇒「金鵄高くて十五銭・・・」

替え唄はどのように伝わったのか？

替え唄はどのようにして伝わっていったのか。ラジオやレコードや雑誌などのマスメディアに登場することはまず考えられない。学校で教師から教えられることもないだろう。にもかかわらず全国各地の子どもたちが類似する替え唄が歌っていたという事実は驚くばかりで、謎である。今回、外山さんに一番お聞きしたかったのもそのことだった。

「よく分かりませんね」とおっしゃる外山さんに、私の仮説を紹介してみた。伝承経路の一つは、疎開先の地元の子どもたちと疎開児童との交流の中で互いの持ちネタを伝える。もう一つは若者が軍隊に入隊して、出身地の違う同期兵たちと交流する中で持ちネタを伝え合い、出征前に一時帰省した際、自分の弟妹や近所の子どもたちに「置き土産」として伝える。

すると、外山さんは次のように話した。地元の子どもたちと交流する機会はほとんどなかったし、入隊したお兄さんから教えてもらったという経験もなかったが、一つ思い出したことがある。同級生の中に、最初は縁故疎開で愛媛県松山市に行っていた子どもが、何か事情があって途中から集団疎開に参加してきたのだが、彼が松山にある予科練（海軍飛行予科練習生航空隊）のことを歌った歌を聞かせてくれ、予科練に行くことは憧れだったので感銘を受けた。初めて聞いた歌だったという。この場合は替え唄ではなかったが、替え唄が歌われた可能性も考えられ、三つ目の伝承経路だと言える。

今後、これら三つの伝承経路について具体的な証言としてお聞きする一方で、さらなる経路の可能性についても調べていきたい。

敗戦の日　1945・8・15

晴　二十八度五分　今日はぼん（盆）である。午前中たき木運びであった。鍋島先生の投げ落された木に当り石がころんで来てあたり、がんばったがとうとう泣き出してしまった。昼から兵隊ごっこをした。僕は大ゐ[尉]になった。遊びつかれて寮にいると宇和川先生[女性]が「日本はむじやうけんこうふ

く［無条件降伏］した。だがまだ負けてゐない最後までか［が］んばれ。」といはれた。敵のデマせんでん（宣伝）と思へてしかたがない。残念だ……

帰郷の日　1945・10・15

今日は家へ帰るたのしい日だ。四時に起床してふとんを荷作りした。清水君のふとん包へいっしょに入れてもらった。朝食のざふすゐ［雑炊］にきのふ残したご飯を入れて食べた。朝会がすんで土間の前へ整列した。土地の人に別れをつげてなつかしい牛滝を後に出発した。内畑の学校で式をすませて昼御飯をたべた。バスに乗って岸和田の駅で降り電車にのった。数分の後に住吉の駅についた。住吉神社生根神社にお参りをした。三時過ぎになつかしき母校に到着した。学校にはお父さんお母さんが迎へに来てをられた。式をすましてさつまいものおみやげをもらって家へ帰った。うれしくて ／＼ 筆にも鉛筆にも書きあらはせない。

家が馬鹿に小さいやうに感じた。夕食には残してをいて下さった。［ママ］かんづめを開けてごちさうをしていただいた。夜おそくまでいろいろお話した。

8月 15 日の終戦の日、無条件降伏の詔勅を小学校女性教師や小学５年生の男の子がどう受け止めたのかが分かる。また、さらに２ヵ月も疎開生活を続けなければならなかったこと、そして、「うれしくて ／＼ 筆にも鉛筆にも書きあらはせない」と綴った外山さんの真情に胸を打たれる。

「おうちがだんだん　近くなる　近くなる　去年きたこの道　かえりゃんせ　かえりゃんせ」と替え唄を歌いながら、わが家への帰り道を胸はずませて急いだのだった。

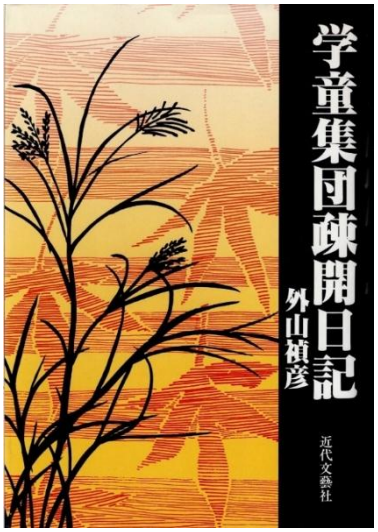
おわりに ―子どもからの質問に答えて―

ある時、外山さんが小学生たちに学童疎開体験談をした後に、子どもたちの一人から次のような質問を受けたという。「一年ぶりにわが家へ帰った日の夕食に、缶詰を開けてごちそうしてもらったというのは理解できません」。

今日の日本では、缶詰は災害用常備食であり非常食であるといったイメージがあり、ごちそうとは言えないものだろう。けれども戦中戦後の日本では、缶詰は一般家庭においてめったに食べられない高級品であり、何よりのごちそうだった。そんな説明をしたらようやく得心してもらえたという。

それからもう一つ、「疎開生活がつらかったと言われますが、それならどうして脱走しなかったんですか？」という質問もよく受けるのだそうだ。「脱走しそうとしても、成功することは無理だろうと思っていた」と答えているという。実際に、『日記』の中には、山中へ入っていき、脱走を試みた子ども（たち）の話が一度ならず出てくるが、いずれも教師や他の子どもたちによって発見され、捕まっている。また、現地の住民に見つかっても宿舎へ引き戻されるだろう。それから親の世間体にも傷をつけることになる。そう考えると、我慢するしかなかった――。

外山さんの説明を聞いて、子どもも納得した表情を浮かべたという。「子どもたちの素直な感想や質問を聞けることがうれしい」と話された。

軍歌や替え唄の話もするよう心がけているそうだ。子どもにとって、自分と同じぐらいの年齢だった当時の外山さんがどんなものをどんな気持ちで食べて、どんなことを考え、どんな歌を歌っていたのかを知ることで、心の距離が縮まるに違いない。お互いにとって、とても貴重な機会だろう。

取材を終えた私に、「（話ができる機会は）あと何年もありませんよ」と外山さんは笑って話された。現在 90 歳の彼の言葉を胸に刻んで、ご自宅を後にした。